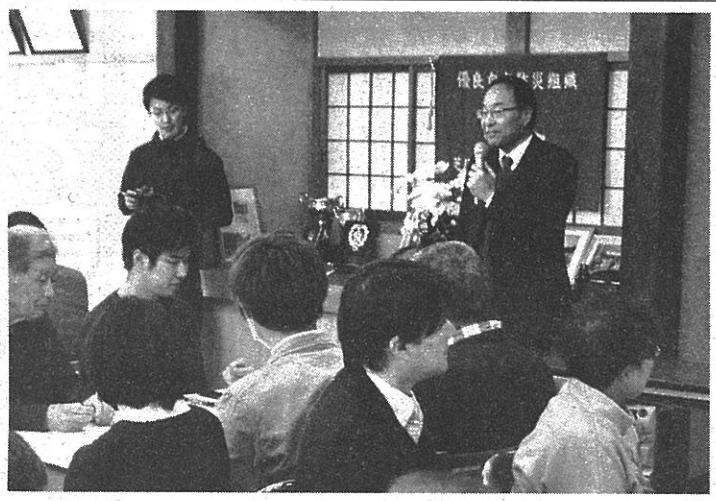
稲子・柚野地区特産品作りなど活動成果発表

静大農学部学生が報告会

静岡大学農学部の学生が富士宮市稲子・柚野地区で取り組んだフィールドワークの1年間の成果を発表する「実践農学演習芝川地区活動報告会」が2日、同市下稲子区民館で開かれた。両地区を訪れ、地域住民と交流しながら学んできた学生約70人が活動を報告するとともに、学生が考えた課題解決方法などについて地元住民と意見を交わした。

同大農学部の学生は8年前から両地区を訪れ、住民と交流しながら農作物の育成、地域の行事への参加に取り組み、同地区の特産品作りなどさまざまな成果を上げている。

報告会では、同大農学部副学部長の鳥山優教授があいさつに立ち、「自らが考えた課題の解決やチームでの取り組みは今、教育の中に取り入れるものだと言われているが、農学部の学生はこの地域でどこよりも早くこの教育に取り組んできた。農学部は生き物が対象となり、人材づくりが大切。取り組みの中で、地域の皆さんが人材を育ててくれている。これからも協力してほしい」と述べた。



あいさつする鳥山教授

取り組みの感想を語る1年生

地元住民代表の佐野幸弘下稲子区長は「学生が農家へ貢献してくれることをありがたく思っています」、佐野貴久上稲子区長は「中山間地の問題解決に真剣に取り組んでくれていることに感謝し、この1年の成果にも期待しています」とそれぞれ述べた。

初めて同地区でフィールドワークに取り組んだ1年生は、「農業への関心が高まった」「知識を学ぶだけではない生の学びができた」「雑草が多いこと、水が無いから川から引いていることなど、ここに来なければ分からないことがたくさんあった」などと感想を述べた。

2、3年生は「静大生と稲子をつなぐ新聞の発行」「コンニャク栽培からお茶栽培へといたる転換期における大代の生活史の調査」「稲子存続のためにユー・トリオをどのように活用するか」などそれぞれのテーマに沿って行った調査の結果、見えてきた課題などを発表。その後の話し合いでは地元住民や行政関係者の声などもあり、学生も熱心に聞き入っていた。